

# 「盲ろう者」として自分らしく生きる ～私にとって障害・仕事・支援とは～

中條 與子 (Nakajoh Yohko)

## 第7回

### 私の日常⑤ 漂えど沈まず

#### 新型コロナウイルス流行から生まれたマスク文化のなかで

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう」として自分らしく生きるということを、もがきながら模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、このマガジンの連載を通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

新型コロナウイルスが流行りマスクをすることが、必須、マナーとなりました。自他ともマスクをすることになり、聞こえにくくて見えにくい盲ろう者としての日常も変化しました。緊急事態宣言中も、その前後も変わらず通勤をしているため、生活のリズムの変化はないのですが、お互いの命を守るためのマスクの存在は、私にとっては移動時もコミュニケーション時も、思った以上に影響が大きいです。影響を受けたことを、少しだけでも文学にすることを試みましたが、できませんでした。日々、「今」に対する判断を考えることが精一杯で、その出来事を整理して書くという事まで広げることができませんでした。

第41号執筆者@短信 中條與子（一部抜粋）

#### はじめに

前号は「第41号執筆者@短信」に、

と書いて、休載させていただいた。

今号は、新型コロナウイルスによる影響について書くつも

りでしたが、あっという間に3ヶ月が過ぎて、締切日がきた。

鼻と口を覆うマスクに影響を受けていることを書きたいと思っても、いまを生きるのが精一杯で、言葉を通して客観的に向き合うエネルギーは、残っていないと思った。今回も休載しようと思った。

お世話になっている方に、思いがけず励ましていただき、単純な私の考えが変化した。休載をして、きちんと整理して書くことが必要だと思っていたが、いま書くことも大事なような気がした。

マスクへの捉え方に対して、前号から変化した自分自身を感じて、3か月後の次号は、今とは違う感じ方の自分があるかもしれないと思ったからだ。(変化していない可能性もある)

現在も新型コロナウイルスから自他とも身を守るためにマスクが必須である状況に変化はないが、流行から生まれたマスク文化のなかで、私自身がすこし変化したことを、簡単に書きたい。言葉足らずで支離滅裂な部分もあるかと思うが、お許しいただきたい。

## マスクをつけての移動について

春ごろ、マスクをつけて始めの移動の際、足が止まった。足元が見えなくて、怖かったのだ。外を歩く時、階段を使用する時、電車の乗り降りの時、目の前は見えるけれど、足が勝手に立ちすくむ。

私の視野の欠け方は、真ん中が残る求心性視野狭窄なので、姿勢を正してまっすぐ立つと視線の先は見えるが、足元が見えない。マスクをすると、更に見える範囲が少なくなり、足元、下半身が存在していないような錯覚に陥る。

この夏、気づいたらマスクをして外を歩くこと、階段を使用すること、電車の乗り降り等にも慣れていくことに気づいた。カフェで、マスクをつけながら、コーヒーを自席まで運ぶことができる

ようになったことに、自画自賛した。環境適応している自分が、面白かった。

マスクをしての見え方が、春から夏にかけて変化した。視野が回復したとは思えない。視細胞が存在する部分の視野は見えて、視細胞が細胞死した部分の視野は欠ける。加齢と疾患により視細胞の減少はあっても増加はないはずだ。

きっと見え方が変化した理由は、マスクをして移動をする必要性に迫られたおかげで、眼球の筋トレになり、眼球の下方への可動範囲が広がったことが考えられる。眼球の動きを支える筋肉が、変化したおかげだと思う。

## マスクをつけての会話について

春ごろ、マスクでの会話が必要になり、お手上げな気持ちになった。

小学校の頃「きこえの教室」というところで読唇術の教育を受けた。口元の動きを見て、聞こえる音声をききながら会話をしてきた。

相手との会話では、マスクで口元が見えなくなると、聞こえる音声だけが頼りになる。しかし、耳に届く語音もマスク繊維の影響を受けているのか、聞こえ方が違う。

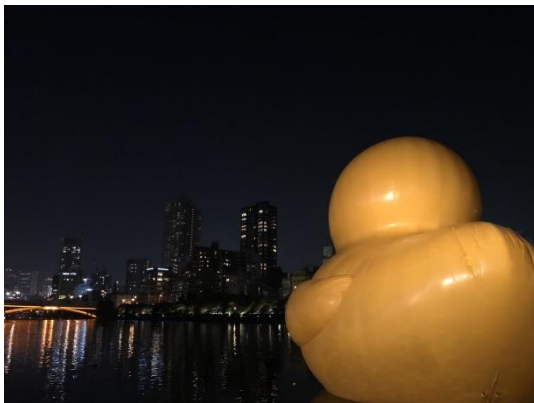
私は感音性難聴のため、高音域が聞こえにくい。言葉の聞きとりにも影響を受ける。母音は低音域が多いため聞きとりやすく、子音は高音域のため聞こえにくい。私の言葉のとらえ方は、母音と聞こえてくる語音をメロディのように聞いて、子音を想像して、言葉を聞き取っていた。

マスクをした相手からは、経験のない語音が聞こえてくる。または、届く音が少ない。私の想像だが、マスクの中で母音と子音が分解した後、繊維を通り抜け、母音と子音の各々に繊維がからまって包まれているのではないかと思うくらい、経験のない語音に聞こえる。わかりにくい説明で申し訳ない。簡単にいうと、マスク(布・紙)を通過した言葉は、わからない事が多いのである。

マスク文化になってから、相手の目を見るようになった。目をずっと見ていると、口や顔ほどではないが表情が豊かなことに気づいた。しかし読目術は、修行すらしていないので間に合わない。どのように会話と向き合えば良いのか悩んでいたところ、はっきり聞こえる瞬間に出会った。

職場で私の席にかかってきた内線である。相手がマスク越しでも、対面では会話が難しくても、受話器を通して内線で話しをすると、不思議なことに聞こえるのだ。電話機という場所は限定されるが、マスク文化のなかでの会話への兆しが見えた瞬間だった。

## 8月初旬のある夜



「漂えど沈まず」という言葉に出会ったのは、湿気のなかを泳いでいるような、蒸し暑い夜のことである。交通機関のSNSで、世界を旅する黄色い子アヒル、ラバーダッグが大阪の天満橋八軒家浜にぷかぷかと浮いていることを知る。通勤途上



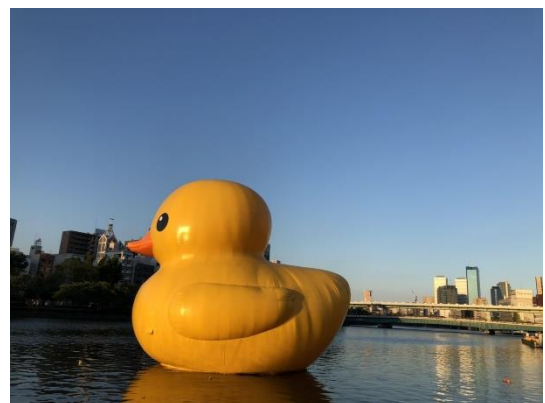
なので、帰りに寄った。

明るい時間に歩いた事がある場所だが、暗い時は初めてだ。白杖から伝わる感覚とスマホにつく懐中電灯機能を駆使しながら、光にぼんやり照らされる黄色い物体を目印に歩いた。

「漂えど沈まず」というテーマと思える言葉は、照らされているため私も読むことができた。「漂えど」と「沈まず」という二つの言葉の組み合わせの意味がよくわからなかったが、明るい時も暗い時も、私の目に「漂えど沈まず」が入った。



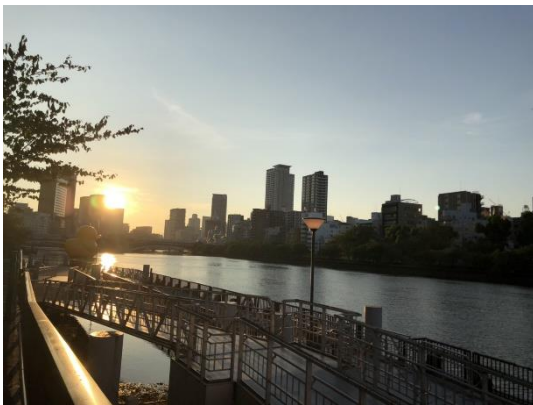
ラバーダッグは、いつも定位置にいるように思えた。タイムラプス（低速度撮影）撮影をすると、風、水流の影響を受けて、前後左右に移動していることがわかった。たぶん、付近にある浮き輪の存在が、ある程度の定位置に固定されている事と関係があるように思えた。



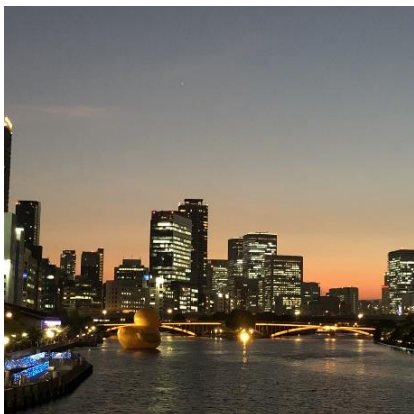
ある朝、人間の手で手当てを受けている場面に



出会った。高湿気と強い太陽光と水面からの反射光、人工的な光にも当て続けられていたはずだ。



私は網膜疾患のため、太陽や光に対して眩しく感じる、羞明という症状がある。ラバーダッグを見に行く時、朝、昼、夜の多くの時間が、眩しく感じていた。



酷暑の一か月間、ラバーダッグは「漂えぞ沈まず」に大川の上に浮き続けていた。

私も暗かったり、眩しかったり、見えにくいこ

とが多かったが、多少見えなくても、この部分は歩道があるとか、私の顔の位置に葉っぱが伸びているとか、柵があって安全だとか、位置を覚える程度には通ってしまった。



ラバーダッグが世界へ、ふたたび旅立つ日の朝、空は天高く秋を感じさせる雲が流れていた。



ラバーダッグの背中（オシリ）を見て、一か月、いろいろと教わった気がした。

マスク文化になっただけで、私は会話でも移動でも、経験のない影響を受けて漂い続けている。しかし、沈まずにいれば、蒸し暑いとしか感じなかった場所でも、涼しく、天高く秋を感じさせる景色に出会えたように、いままでとは違う感覚や景色に出会える瞬間があるかもしれないと思った。